

博物館 NEWS

ニュース



ハボウキガイ類 *Pinna* sp. の密集層(画面の左右31cm)

ハボウキガイ類は、細長い三角形をした二枚貝です。殻頂部(最もとがったところ)を下にして、海底に突きささったような姿勢で生息しています。現生種のハボウキガイ(*Pinna bicolor*)は房総半島以南の浅海に分布しています。

この化石は相生町内山の南海層群(中生代白亜紀前期アプチアン:約1億2000万年前)から産出したものです。多くの個体(約10個体)が折り重なるようにして密集しています。よく見ると、殻の方向が揃っていて、生きていたときの姿勢を示していません。ここに見る個体は、おそらく嵐などによって一

度に海底から掘り出され、多少運搬され、その直後に砂や泥に埋められて化石となったものなのでしょう。

相生町内山の南海層群からは多くの種類の貝化石が産出します。ハボウキガイ類はその中で最も目立つものの一つです。しかし大部分は小さな破片で、このように個体の形や産状がわかる標本は少数です。

ハボウキガイ類の化石は、県内では他に勝浦町広安(白亜紀前期バレミアン:約1億3000万年前、羽ノ浦層)などからも産出します。(中尾)

香川県大内町水主神社の大般若経と浪花勇次郎

- 徳島県史学史の一断面 -

長谷川賢二

なぞの地名 薩麻

奈良市平城宮跡から出土した8世紀の木簡に「阿波国那賀郡薩麻駅」という駅名がある。当時の「那賀郡」は現在の徳島県南域に広がっており、後に海部郡が分かれている。したがって、「薩麻」の所在地については、かなり広い範囲で考える必要がある。しかも、他の史料にもそれに類する地名は見られないため、いくつかの説が提起されているものの、確証は得られていない。最新の地名辞典である『日本歴史地名大系37 徳島県の地名』（平凡社、2000年）でも、那賀郡の地名として「薩麻駅」が立項されているが、「比定地は不詳」とある。

水主神社外陣大般若経

1999年のこと、香川県引田町歴史民俗資料館学芸員の萩野憲司さんから、香川県大内町の水主神社が所蔵する大般若経奥書に「海部郡薩摩郷」という記載があるとうかがった。

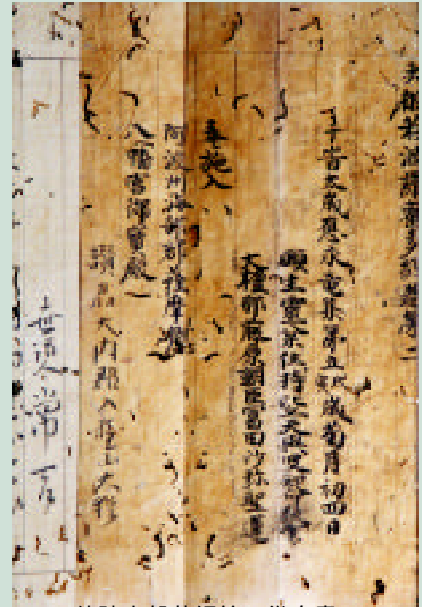
これは貴重な情報だった。なぜなら、先に述べた「薩麻駅」比定のための手がかりとなることが予想されたからである。だが、それ以上に興味深く思ったのは、この大般若経の存在が徳島県内では全く知られていなかったことである。事実、1937年に刊行された『海部郡誌』以下、近年までに刊行された県南の町村史（誌）にも引用されていない。

水主神社には2種類の大般若経が伝来する。ひとつは内陣に安置されていたといわれるもので、国指定重要文化財となっている。すでに公刊されているが、経函の墨書には「箱ノマハリノ木八皆阿州吉井



水主神社

ノ木工ミ成法之助成也」とあり（『大内町史』上巻、大内町、1985年）現在の阿南市吉井町・熊谷町方面との交流がうかがえる。他のひとつがここで話題としているもので、外陣に安置されていたといわれ



外陣大般若経第2巻奥書

る。未だ奥書の全体は紹介されていない（現在編纂が進められている『大内町史補遺編』で詳細な紹介がなされると聞いている）。

その後、2000年の春まだ早い頃、この大般若経に接する機会をいただいたので、薩麻駅の比定地を検討している天羽利夫館長、中世史研究者の福家清司さんとともに、水主神社を訪ねた。1～11巻の奥書には「阿波州海部郡薩摩郷」などの文言が記されており、全体のうち80巻までが、1398～99年（応永5～6）に阿波国海部郡薩摩郷八幡宮に奉納されたものである。それを目の当たりにしたときには、いささか興奮したものだ。

なお、この史料は中世の海部郡に「薩摩郷」という地名があり、そこに八幡宮が祀られていたことを物語るが、明確な位置を特定できるものではない。

大般若経と郷土史家浪花勇次郎

先に記したように、外陣大般若経奥書は徳島県では未知のものであった。少なくとも、公刊された関係文献を見る限りでは、そうとしか思われな

いものだった。ところが、この史料の情報はすでに、戦前期に徳島にもたらされていたのである。

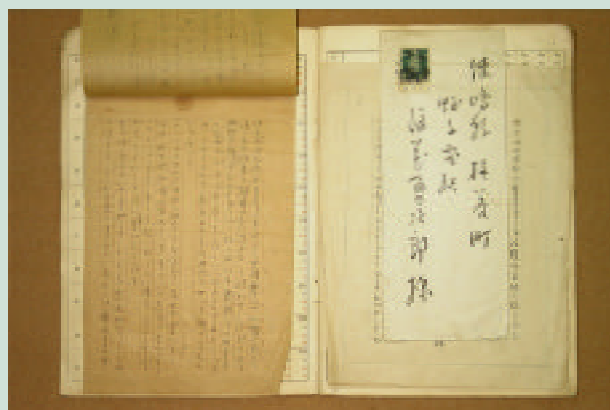
当館には、戦前から戦後にかけて活動した郷土

史家浪花勇次郎の遺品の一部が、ご遺族からの寄贈を受けて収蔵されている。蔵書や収集品、新聞スクラップ、書簡等その内容はさまざまである。

浪花は鉄道現業職員として働いたわら郷土史研究に取り組んだ人物で、1930年(昭和5)阿波郷土研究会の創立時に参集した一人でもあった(阿波郷土研究会は、1936年に阿波郷土教育研究会と合併して阿波郷土会に改称。戦時期の中断をはさみ、現在も存続している)。主として金石資料の調査研究に力を注いでおり、『阿波国金石文目録』(私家版、1951年)、『阿波国金石年表』(徳島県教育会、1962年)、『阿波国古瓦拓本集』(阿波国古瓦拓本集刊行会、1973年)などの著作がある。

さて、浪花の遺品には断片的なものが多く、当館でも十分な活用がなされてはいない。最近1930年代に阿波郷土研究会などが博物館の建設を構想していたことを知り、浪花の遺品に関連するものがないか調べていたところ、偶然にも水主神社外陣大般若経のことと記された書簡2通を見つけた。これらは香川県牟礼村洲崎寺(牟礼村は現在の牟礼町)の御城俊禅からのもので、御城から浪花に宛てた書簡10通、ハガキ3通をスクラップした帳簿に収められている。消印から見ると、1940~41年(昭和15~16)の間のものである。

彼らの交流は1940年7月、御城が浪花に対し、拓本を所望する書簡を送ったのが最初である。これによれば、御城自身、寺院の瓦を研究しており、拓本を収集していた。そのためか、浪花が御城を訪ねたり、相互に問い合わせし合う研究仲間となっていたことがうかがえる。その話題はやはり瓦に関するものが主だが、経塚遺物、石造物などにも及んでいる。1941年6月7日のものと見られる書簡には「お蔭に依って貴国の古瓦拓本全部蒐集出来たといつて差支なきまでに沢山なりました」とあり、短期間のうちに交流が進んだようである。



御城俊禅の書簡

さて、肝腎の大般若経のことを記す書簡は、1941年8月22日の消印を伴う封筒とともに綴じられたもの1通と年月日不明のもの1通とがある。前者によれば、これに先立って御城が「海部薩摩郷八幡宮」について浪花に問い合わせたらしく、その補足情報としてしたためられている。関心事はいうまでもなく、薩摩郷の比定地である。「地理を調べてみると海部川下流川西・川東両村跨っての地事らし」と所見を記している。また後者は続報であり、第3・81・83・88・92巻の奥書を紹介して大般若経の来歴や現況を記し、「貴地海部川沿岸の多羅、富田等いふ地名を書きある関係上薩摩郷は全川沿岸の一地方名なりし」と見解を述べている。

これらの書簡に対する浪花の返事がどのようなものであったかは知る由もないし、自ら大般若経を調査したかどうかも分からない。ただいえるのは、戦時体制まっただ中の時代に、水主神社外陣大般若経奥書についての詳細な情報が徳島の郷土史家のもとに届いていたという事実である。彼の関心が主として金石資料にあったためか、残念ながら、この件が公表された形跡はない。

それにしても、郷土史家のネットワークの広がりや彼らの知の蓄積を探索・吟味し、それを的確に位置づける必要性を痛感した一件だった。

史学史の探求へ

これまで戦前以来の郷土史家の業績が顧みられることは少なかったが、実証や史料研究の成果には見るべきものが多いことなどから、再評価・検証の気運が高まっている。最近では、島田泉山、飯田義資、一宮松次の仕事を検討する動きが見られるほか、近世の国学者をも射程に入れる必要性が提起されている。

戦後60年近くを経た今日、彼らの蓄積を探ることは容易ではない。だが、史学史の探求は、徳島の地に刻まれた歴史をとらえていく上で不可欠の作業となるだろう。及ばずながら、私もそうしたことを課題のひとつに位置づけていきたいと思う。

なお、水主神社外陣大般若経の閲覧については、水主神社宮司大内正文氏、大内町文化財保護審議会長島田治氏、仏教大学教授今堀太逸氏、引田町歴史民俗資料館学芸員萩野憲司氏に多大なご配慮をいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

(歴史担当)

おまけになった

動物たち



2年ほど前から、動物をモチーフにしたお菓子のおまけが人気を集めています。テレビや新聞でも取り上げられることがあり、「チョコエッグ」と言えばご存知の方もいることでしょう。

お菓子のおまけと言えば、子どもたちを対象にしたもの、とくにアニメのヒーローなどのキャラクターものがまず思い浮かびます。古くは、キャラメルのおまけとして乗り物なども人気がありました。ところが、今回の主役は、ヒーローでも何でもないリアルな野生動物たちです。しかしこの動物たち、おまけと呼ぶにはあまりにも精巧にできています。それもそのはず、おまけの原型を手がけたのは博物館などにも動物模型を納めている模型づくりのプロなのです。今回のブームの一因には、この精巧さがあげられます。単に精密と言うだけではなく、それぞれの動物の特徴をしっかりとらえた表現がなされています。

原型を型取りして作られた金型にプラスチックを流し込んでできたものに1個ずつ手作業で彩色されて完成するおまけは、博物館などで展示されているレプリカと基本的にはまったく同じ工程で作られたものなのです。

卵形のチョコレートを割ると中に小さなプラスチックのカプセルが入っていて、いろいろな動物たちが出てくるというコンセプトのこのお菓子は、メーカー側の当初の見込みを大きく裏切って、子どもたちだけではなく大人に爆発的に人気を呼び、予想以上に一大ブームを巻き起こしました。

チョコエッグに端を発した動物たちをモチーフにしたおまけブームは、その後多くのお菓子メーカーからさまざまな種類のものが発売され、現在では何種類あるかわからないほどになっています。ブームの火付け役となったチョコエッグ日本の動物シリーズは現在144種類にもものぼり、ついで発売された恐竜や古代生物をモチーフにしたチョコラザウルスも現在72種類を数えます。

こどものころからおまけが大好きで、収集癖もあった筆者は、この2大シリーズを中心にすっかりコレクションにはまってしまい、今では自宅はおまけだらけになっています。そこでこの精巧なおまけたちをできるだけ多くの人に見ていただき、自然や動物に関する事、人間のわざに関する事など何かを感じてもらえれば、また博物館に関心を持っていただくきっかけとなればと言う思いから、昨年の夏から「おまけになった動物たち」と題して、2階の常設展示入り口付近にミニミニ展示をはじめました。おかげさまで、これまでたいへんご好評をいただいております。

今回、このミニミニ展示をさらに発展させて、3月25日から部門展示室(人文)の一角で展示を行っています。200種類以上のおまけになった動物たちが一同に会し、それらにちなんだ実物標本などもあわせて展示されています。小さな小さなおまけたちですが、とても不思議な魅力がいっぱいで、きっと見る人に何かを感じさせてくれることと思います。ぜひご家族お揃いでおまけになった動物たちに会いに来てください。

(保存科学担当：魚島純一)



メガテリウムも待ってるよ！

企画展

貝化石が語る海の記憶

貝類(軟体動物)がはっきりした形で化石記録に現れた時代は、古生代初頭のカンブリア紀です。当時はそれほど目立ったグループではありませんでしたが、その後の時代になると生息域が拡大し、種数や個体数も増えていきました。現生種は10万種あるいはそれ以上におよぶと見積もられています。

この企画展では、おもに古生物学的な観点から、貝類や貝化石を探っていきます。貝化石は湖でできた地層や陸上で堆積した地層の中にも入っていますが、最も多く見つかるのは海の地層です。それらを詳しく観察すると、それぞれの個体が生きていたころの海やそれぞれの個体に関するさまざまな情報 - 時代、水温、水深、波や水流の強さ、生活場所、死因 - などを読みとることができます。これらは、貝類が化石記録の中に現れてから現在までに歩んできた進化の道のりを具体的に示すものともいうことができるでしょう。

一見何のへんてつもない貝化石がそっと示す、多彩で豊かな海の記録の一端を読んでいただけたらと思います。

展示の構成

貝と貝化石

貝の様態と形

貝がすむいろいろな環境

地質時代の貝化石

四国の貝化石

貝殻や貝化石をつくる鉱物

地層の中の貝化石

貝化石の調べ方

開催期間

2002年4月12日(金) ~ 5月12日(日)

開館時間

午前9時30分 ~ 午後5時

休館日

4月15日(月)、22日(月)、30日(火)

5月7日(火)

観覧料

一般 200円(160円)

高校・大学生 100円(80円)

小・中学生 50円(40円)

()は20名以上の団体料金

学芸員による展示解説

第1回 4月14日(日) 13:30 ~ 14:30

第2回 4月28日(日) 13:30 ~ 14:30

会場 企画展示室(観覧料が必要です)



トリゴニア(ドイツ、中生代ジュラ紀)



コノカルディウム(ドイツ、古生代デボン紀)



アツリア(チリ、新生代第三紀)

今山の農村舞台

かつうらちょういまやまいみや

去る1月19、20日に、勝浦町今山今宮神社に残る農村舞台が、約70年ぶりに人形浄瑠璃芝居を上演していた当時の形に、地元の人達の手によって復元されました。その作業の様子を紹介します。

農村舞台は江戸時代頃から、村人が歌舞伎や人形芝居を上演し楽しむために、各地に設けられた舞台です。人形浄瑠璃芝居が盛んであった徳島県にはたくさんの農村舞台があったことが知られています。けれども、現在定期的に舞台として使用されているのは、大飼の農村舞台と坂州の農村舞台の2つだけで、現存はしていても多くの農村舞台はひっそりと眠り、人々の記憶から薄れていきつつあります。

今山の農村舞台も長い間雨戸を閉ざして建っていました。今回、舞台としての形に復元することとなったきっかけは、徳島市出身で東京理科大学大学院在学、川上光洋氏の調査・研究によってこの舞台が「仮設式舟底舞台」とされる特徴的な形式を持つものだとわかったことです。

農村舞台には、大きく分けて、床全面が平らな平舞台と人形芝居上演向けの、床面に上段、下段の段差を持つ舟底舞台と呼ぶ形式があります。今山の農村舞台は平常時は平舞台ですが、人形芝居を行う時には床に段差を設け舟底舞台に転換でき

るしくみになっています。このようなしくみをもつ「仮設式舟底舞台」の現存数は非常に少なく、本来のしくみを維持しているのはこの今山の舞台と他に群馬県赤城村にある上の森の農村舞台が確認されるだけだということです。

川上氏から今山の農村舞台の意義を知り受けた、今山在住で人形座・勝浦座に在籍している新居福夫氏が地区の人々に声をかけ、他に山本靖広（区長）、前野善弘（宮総代）、岡田勤（宮総代）、田中実、今岡重幸、大久保巖、山畑和男、中野清、山村治、山村英男の諸氏が、地区の舞台の本来の姿を取り戻してみようと休日に集まり、川上氏とともに平舞台から舟底舞台への転換という復元の作業が行われました。

地区の人々の息のあった共同作業、培われてきた記憶と技術が重なり合って見事に舞台は人形芝居むけの舟底舞台に変身し、「仮設式舟底舞台」の機能が蘇りました。作業の後には勝浦座より借り受けた人形が地元の人達によって舞台上で操られました。

参考文献 川上光洋・川向正人「舟底舞台（仮設と固定）形式と人形芝居専用化について 阿波の農村舞台の空間転換機構に関する研究」『日本建築学会計画系論文集 第552号』2002年

（民俗担当 庄武憲子）



図1 人形を操る場、上段(本手)、下段(二の手)を設けるため平面の床板をとりはずす。



図2 本手、二の手となる部分の土間が顕れたところ。



図3 本手となる部分は土間から1尺の所に床板を敷き直す。



図4 本手の背後に絵襖を入れるための鴨居を取り付ける。



図5 絵襖、小襖、幕、暖簾をつけ人形芝居用の舞台に完成。



図6 完成後、「傾城阿波の鳴門」お鶴とお弓の人形を操る。

むかで 百本足の百足はいるのでしょうか?

ムカデは漢字で百足と書きます。英語では centepede と呼び、これも百本の足という意味です。では本当に百本の足を持つムカデはいるのでしょうか。

この問いに答える前に、しばしムカデの世界をのぞいてみましょう。ムカデは世界に約2800種ほど知られ、大きく5つのグループに分けられます。日本にいるのはそのうちの4つで、オオムカデ類、ジムカデ類、イシムカデ類、ゲジ類です(図1)。

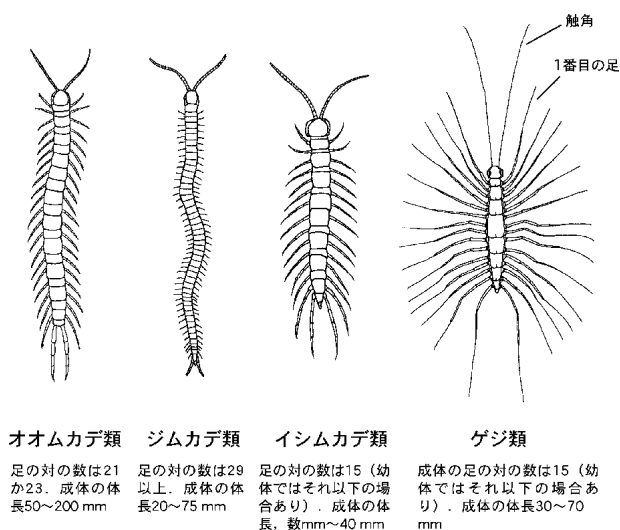


図1 日本に生息するムカデの4つのグループ。

私達を毒牙で咬んで困らせるのはオオムカデ類です(図2)。体長が10cmを超える大型のムカデはこの仲間です。ジムカデ(地百足)類(図3)は落葉土中のやや潜ったところに住んでいる細長いムカデです。イシムカデ(石百足)類は体長1-3cmほどと小型で、名の通り石の下などでよくみられ、すばしこく動き回ります。ゲジ類は長い足が特徴で、



図2 アオズムカデ。オオムカデ類に属する。徳島県徳島市産。



図3 ベニジムカデ属の一種。ジムカデ類に属する。徳島県佐那河内村産。足が百本を超えるのはこのジムカデ類だけ。

機動力に優れ、ジャンプして獲物を捕らえることもあります。

さて、話しをもとにもどして、4つのグループごとに足の対の数をみてみましょう。イシムカデ類とゲジ類では足の対の数はすべて15対です(幼体ではそれより少ないことがあります)。よって足の数は30本です。オオムカデ類のものは21か23対なので、足の数は42か46本のどちらかです。よって、これら3つのグループでは足の数は百本に遠くおよばないのです。百本足の可能性があるのは残るジムカデ類だけです。

おもしろいことにジムカデ類では種類ごとに、また同じ種類でも一匹ごとに足の対の数が違うこともあります。ジムカデ類は世界に約1000種以上が知られ、足の対の数には29-191の幅があります。足の数にすると58-382本です。

ここで奇妙なのはムカデの足の対の数はどれもすべて奇数だということです。百本足ということは50対の足を持つことになりますが、50は偶数です。よって、百本足のムカデというのは知られていないのです。自然界とは本当に不思議なものです。

1999年の夏、ポーランドで開かれた国際多足類会議に参加したとき、ジムカデ類の足の数に関連した発表がいくつかありました。足の研究は人気があるんだなという印象でした。それからしばらくして、その研究のうちの一つについての論文が国際的に有名な英国の科学雑誌『ネイチャー』に掲載されました。人知れず暮らしているムカデ達もようやく科学で脚光を浴びるときがきたのかと、ちょっと嬉しくもありました。(動物担当 田辺 力)

4月から6月までの博物館普及行事

あなたも参加してみませんか？

シリーズ	行事名	実施日	実施時間	対象(人数)
野外自然かんさつ	磯のいきもの	5月12日(日)	11:00~13:00	鳴門市 龍宮の磯 (70名) 2
	磯のいきもの	5月26日(日)	11:00~13:00	鳴門市 龍宮の磯 (70名) 2
	引田町城山の地質見学	6月 9日(日)	10:00~15:00	小学生から一般 (40名) 2
歴史散歩	古墳見学	5月19日(日)	9:00~16:00	美馬町・脇町 (45名) 2
	蜂須賀家の墓をしらべよう	6月16日(日)	13:30~15:00	徳島市興源寺 (30名) 2
	石オノをつくろう	4月27日(土)	10:00~15:00	小学生から一般 (30名) 2
歴史体験	江戸時代の農民の主食/麦ごはんを食べてみよう	6月 2日(日)	13:30~15:30	小学生から一般 (20名) 2
	阿波忌部の世界	5月26日(日)	13:30~15:00	海南文化村 小学生から一般 (50名) 1
移動講座	阿波忌部の世界	6月23日(日)	13:30~15:00	海南文化村 小学生から一般 (50名) 1
	春の野草かんさつ	4月28日(日)	13:30~16:30	小学生から一般 (20名) 2
室内実習	春の野草かんさつ	4月28日(日)	13:30~16:30	小学生から一般 (20名) 2
みどりの探検隊	春の那賀川に咲く植物を探そう	4月21日(日)	10:00~15:00	鷺敷町 (15名) 2
ミュージアムトーク	ちょっとマニアックな貝化石の話	5月11日(土)	13:30~15:00	小学校高学年以上 (50名) 1
その他	企画展展示解説	4月14日(日)	13:30~14:30	企画展「貝化石が語る海の記憶」 小学生から一般 (30名) 1
	企画展展示解説	4月28日(日)	13:30~14:30	企画展「貝化石が語る海の記憶」 小学生から一般 (30名) 1
	博物館こどもの日フェスティバル	5月 5日(日)	9:30~14:00	幼児、小・中学生 1

1は、申し込み不要です。その他は、往復はがきでお申し込みください。(各行事の1カ月前から10日前までに届くように)

2は、小学生の場合保護者同伴。

くわしいことは博物館にお問い合わせください。

小中高生の常設展・企画展無料(平日の個人以外)

平成14年度から学校完全週5日制や総合的な学習の時間の導入など学校教育改革が行われます。それに対応し、博物館ではより多くの児童生徒が博物館を訪れ、文化に親しむことができるように、小中高生の常設展・企画展観覧が一部無料となります。詳しくは、次の表をご覧ください。

区分	学習活動		土曜休業		長期休業		日曜		祝日	
	常設展	企画展	常設展	企画展	常設展	企画展	常設展	企画展	常設展	企画展
小中高生	現行	無料	無料						無料	
	改正	無料	無料	無料	無料	無料	無料	無料	無料	無料

博学連携モデル事業や教科部会の開催



麻植郡小学校理科部会 実習：雑草での紙づくり(H.13.8.8)

博物館では、県内の学校との交流を促進し、博物館における学校教育への支援のあり方及び学校教育における博物館の活用方法等について検討するため、博物館と学校との連携に関する研究会を平成12年度に設置しました。その後、モデル事業を通して、問題点や改善策を検討してきました。また、郡市の教科部会を博物館において行い、先生方の研修としました。今後も親しみのある博物館をめざして活動していきます。

博物館ニュース No. 46

発行年月日 2002年3月25日
 編集・発行 徳島県立博物館 〒770-8070 徳島市八万町向寺山
 TEL 088-668-3636 FAX 088-668-7197
<http://www.museum.comet.go.jp>